

聖書：マルコの福音書 7：24～30

説教題：食卓の下の小犬でも

日時：2025 年 11 月 2 日（朝拝）

イエス様は今日の箇所です。ツロの地方へと行かれました。ツロとはガリラヤ湖の北西、地中海沿岸に位置する異邦人の町です。なぜイエス様は異邦人の土地へと出て行かれたのでしょうか。24 節に「家に入って、だれにも知られたくないと思っておられた」とありますから、宣教のためではなかったことが分かります。おそらく一旦退くためであったのでしょう。直前の箇所ではパリサイ人やエルサレムから来た律法学者たちによる攻撃がありました。その少し前にはイエス様の先駆者であるバプテスマのヨハネを殉教へと追いやったヘロデ王の暴挙が記されました。そうした圧力から一時的に身を引き、休息を取るため、そしてこれから待ち受けるであろう出来事に備えて霊的な準備をするためであったと考えられます。ところがイエス様は隠れていることができませんでした。ある女の人が、すぐにイエス様のことを聞き、やって来て足もとにひれ伏します。彼女の幼い娘は、汚れた霊につかれています。「彼女はギリシア人で、シリア・フェニキアの生まれであった」とあります。つまり異邦人であるということです。その彼女が「自分の娘から悪霊を追い出してください」イエス様に願ったのです。この「願った」という言葉は過去の継続を示す時制で書かれています。すなわち 1 回だけでなく、何度も繰り返して願ったのです。さて、イエス様はどう応じられたのでしょうか。

27 節を見ると、イエス様はすぐには彼女に応答されなかったことが分かります。だからこそ彼女は何度も何度も繰り返し願ったのです。このあたりの様子は平行記事であるマタイの福音書 15 章を見ると、よりはっきりします。イエス様はここで「まず子どもたちを満腹にさせなければなりません」と言われました。「子どもたち」とはイスラエルの民、ユダヤ人のことです。まず彼らを養い、祝福すること。それがわたしの第一の任務であるとイエス様は答えられました。マタイの福音書 15 章 24 節を見ると、女の求めを聞いてもなお取り合わないでいた時、イエス様は弟子たちにこう言ったと書かれています。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」これは神の目的がそうであるということです。イエス様は父なる神に遣わされて、この地上に来られ、働いておられました。その神によって遣わされているのは、イスラエルの家の失われた羊たちに対してだと言っておられま

す。ですからマタイの福音書の10章5～6節でも、弟子たちを宣教に派遣する際、こう命じられました。「異邦人の道に行ってははいけません。また、サマリア人の町に入ってははいけません。むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。」イエス様は父なる神から与えられた使命に忠実に歩んでいるご自身であることを、このようにここでも証しされたのです。

そして彼女にこう続けました。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」 犬は、今日の人々が抱くイメージとは違って、当時はたちの悪い動物の代表でした。通りを歩き回って吠え、ごみ箱をあさる卑しい存在です。ユダヤ人は聖いものとそうでないものとを区別せずに食べる異邦人を、まさに「犬」と呼んで見下していました。そうした当時の一般的な見方が、このイエス様の言葉の背景にはあると言えるでしょう。片や子ども、片や犬です。イエス様は一体何ということを抑ったんでしょうか！

しかし、さらに驚かされるのは、28節のこの女の人の言葉です。彼女はイエス様の言葉を聞いても憤慨しませんでした。彼女はまず「主よ」と言います。イエス様に対する敬意を失わず、なお近づいています。そして「食卓の下の小犬でも」と言いました。自分がそのように言われたことを受け止めています。怒ってはいません。「人を犬呼ばわりするなんて、何とひどい方でしょう！ そんな風に人を見下すなら、もうあなたには頼みません！」 彼女はそう言って、この場を立ち去ることをしませんでした。後でも触れますが、これこそが祝福に至る道です。怒ってしまえば、そこで終わりです。彼女はイエス様の言葉を聞いて、まず受け止めました。その言葉の前にへりくだったのです。

そして続けました。「でも、子どもたちのパン屑はいただきます。」 彼女はイエス様の言葉の中の「小犬」という言葉に注目しました。イエス様はただ「犬」と言ったわけではありません。犬は先に述べたように、通りをさまよい、汚れたものをあさる卑しい動物の象徴でした。しかし「小犬」という言葉は家庭で飼われる小さな犬、つまりペットを指します。その小犬は子どものパンを奪って食べることはしませんが、食卓から落ちたパン屑を食べることは日常的に許されていました。彼女はそこに希望を見出します。たとえ自分が食卓の下の小犬であっても、そのおこぼれにはあずかることが許されているでしょう？それはいただいてもいいでしょう？それなら、そのパン

屑を是非いただきたい！——そう言ったのです。ここに、彼女の驚くべき信仰が現れています。

イエス様はこれを聞いて、「そこまで言うのなら」と言って、彼女の願いをかなえられました。この「そこまで言うのなら」という言葉はどんなニュアンスでしょうか。イエス様はもともと彼女の願いを聞くつもりはなかったけれど、彼女の受け答えが見事だったので、ついには脱帽し、ご自分の負けを認めて祝福したということでしょうか。しかしもう一つの理解の仕方もあります。それは先のイエス様の言葉は彼女に対する「挑戦」だったということです。つまりそれはテストのための言葉だった。それはこのやり取りを通して大切な真理を彼女に伝えるためであり、また彼女の信仰を引き出すためです。29 節の「そこまで言うのなら」という言葉は、原文を直訳すると、「この言葉のゆえに」となります。つまり、「あなたがそう言ったから」ということです。他の日本語訳聖書では「そのことばで十分である」と訳されています。つまり「あなたはテストに合格した」ということです。イエス様はここで喜んでいるのです。創世記でヤコブと相撲をとった神が「あなたは勝った」と言って彼を祝福したように、イエス様は彼女に勝たせる仕方で彼女を祝福している。これはイエス様が最初から意図したことであり、また願わしい結果であったということです。イエス様は「家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました」と言われました。そして彼女が家に帰ると、その通り、悪霊はすでに彼女の娘から出ていました。彼女はこのようなして祝福を受けたのです。

以上の箇所は私たちに何を教えているのでしょうか。三つのことを述べたいと思います。まず第一に「神の救いの歴史におけるイスラエルの優先性」です。神がイスラエルを選び、イスラエルを通して全世界に対する働きを行おうとされたことは聖書全体から明らかです。ローマ人への手紙 3 章 1～2 節：「それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。割礼に何の益があるのですか。あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました。」 9 章 4～5 節：「彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。父祖たちも彼らのものです。キリストも、肉によれば彼らから出ました。キリストは万物の上にあり、とこしえにほむべき神です。アーメン。」しかしこれはイスラエルが神の祝福を独占するという意味ではありません。イスラエルにまず神の祝福が与えられたのは、救いのストーリーにおける秩序の問題、順序の問題

題です。神はイスラエルを祝福し、そのイスラエルを通して全世界に祝福をもたらそうとされました。祝福を先に受けた者には、その祝福を運び行く「運搬者」としての使命と責任が与えられています。それはイスラエルの祖アブラハムの召命からすでに示されていました。神は創世記 12 章 3 節でこう語られました。「地のすべての部族はあなたによって祝福される。」ここに神が最初から全世界の救いを心にかけておられることが示されています。またイザヤ書 49 章でも、神がイスラエルをご自身のもとに集め、回復されるのは、イスラエルだけのためではないと語られています。49 章 6 節：「わたしはあなたを国々の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」この使命を果たすために、イエス様はこの段階において「まずユダヤ人を第一に」という神の御心に従い、そのためにご自身を集中してささげておられたのです。

第二に今日の箇所は「神の救いの祝福には異邦人も含まれる」ということを示しています。やがてその日が来ることを旧約の預言者たちは繰り返し語りました。たとえばイザヤ書 2 章 2～3 節：「終わりの日に、主の家の山は山々の頂に堅く立ち、もろもろの丘より高くそびえ立つ。そこにすべての国々が流れて来る。多くの民族が来て言う。『さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を私たちに教えてください。私たちはその道筋を進もう。』」この祝福をもたらす約束のメシアはすでに地上に来られています。確かに異邦人への働きが本格的に始まるのは、イエス様が十字架と復活を経て全世界の主としてあげられた後のことです。異邦人がユダヤ人と同じ救いにあずかることが神の御心であることは、使徒の働き 10 章のペテロとコルネリウスの会見を通してはっきり示されます。今日の箇所はそれより前の出来事です。しかしすでにその恵みはこぼれ落ちていたと言えるでしょう。イエス様は確かに宣教のために異邦人の地へ行かれたのではありませんでしたが、約束のメシアはそこに足を踏み入れています。その救い主に目を留め、信じて近づいた者には、恵みが与えられました。この出来事は救いは異邦人にも与えられること、それが神の御心であることを先取りして証しています。その祝福の前触れ、プレビューがここに描かれているのです。

そして三つ目に、この祝福にあずかるための信仰について私たちはこのシリア・フェニキア生まれの異邦人の女から学ぶことができます。二つの点に注目したいと思います。一つは彼女の謙遜です。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです」というイエス様の言葉を聞いて、彼女は怒りませんでした。む

しろ自分は犬のような者だというイエス様の言葉を受け止め、なお近づいて行きました。異邦人なら誰でもこのように応答したかと言えば、そうではなかったと思います。むしろ多くの人は反発したのではないのでしょうか。しかし彼女はそうしませんでした。なぜでしょう。それは彼女の内にへりくだった心があったからです。「犬と言われれば、確かに犬です。そのように呼ばれても仕方のない者です。ユダヤ人から見れば、そう言われても仕方ありません。そしてそれ以上に私は何かを主張できる者ではない。その権利も資格も持たない者です。」——彼女はそう認めたのです。けれども素晴らしいのは、それでも希望を捨てなかったことです。ある人がこう言いました。西洋文化では、人は「これは自分が当然受け取るべきものだ」と主張して、それを得ようとする。自分の権利や資格を訴え、正当な扱いを求めて争う。もし少しでも自分の権利が侵害されたと感じれば、すぐに裁判を起こすなどして行動する。そのような「私には資格があります」という主張をもって、当然の権利として受け取るという生き方をしていると。しかし今日の箇所の彼女はその道を行っていません。彼女は自己主張していません。犬と言われて、犬ですと言っています。にもかかわらずイエス様に肉薄したのです。

彼女から学ぶ二つ目のことは、神の恵みの大きさに対する信頼です。「私に資格はありません。でも主よ、あなたの恵みはあふれるほど大きいのです！それはこぼれる落ちるほどです。そのパン屑なら、わたしもいただけます！」——これが彼女の信仰でした。先に見たように、私たちはプライドが高いと神の救いを受け取ることができません。神の救いにあずかるためにはへりくだりが必要です。しかし一方で、自分をあまりにも低く見て、「こんな私では神の恵みを受けられない」と思い込み、神から遠ざかる誤りもあります。しかし今日の箇所の彼女は、このどちらにも陥りませんでした。「自分には資格はなくても、あなたの恵みは大きいから、そのこぼれ落ちるものにはあずかせていただけます！」と信じて近づいたのです。イエス様はその信仰を喜ばれ、「それで十分である」と言われたのです。

私たちもそのようにイエス様に近づく者でありたいと思います。私たちは神の前に何の資格も権利も持たない者です。しかし神の恵みは大きく豊かなので、こんな者をもなお養ってくださいます。私たちもかつては神から遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約について他国人でした。けれども時満ちて、福音はこの日本にも伝えられ、今やその恵みは豊かにこぼれ落ち、私たちにも届いています。私たちも

へりくだってイエス様のことばに耳を傾け、そこにある恵みのヒント、恵みへの招きをしっかりとつかむ者でありたいと思います。私たちは立派でなくても良いのです。神の祝福に本来値しない者であると認めて良いのです。それでも神は豊かに私たちを祝福することができます。このことを信じて、権利としてではなく、恵みとして求める者でありたいと思います。そしてイエス様に喜ばれ、そのような者のために最初から用意くださっていた神の救いと祝福に豊かに生かされる者とされて行きましょう。